

日本の正月のまゆ玉や 養蚕の発祥地は茨城!?

つくば市・蚕影山神社 こかげさん



新年を迎えた小正月に木の枝に餅や団子を刺し神棚や土間に飾り、その年の豊作などを祈る「まゆ玉」の風習は全国各地で見られます。この行事の発祥はつくば市の蚕影山神社とされています。

その由来は、遠くインドのお姫さまが継母の数々のいじめにあい、見かねた王さまが桑の木で出来た丸木舟に乗せ「お前は女神の化身であるから、仏法の国へ流れ着いて民衆を救いなさい」と送り出したことが始まりでした。

その姫は金色姫と言いますが、茨城の豊浦湊に漂着しました。そこで地元の権太夫という夫妻が姫を救い出し可愛がりますが、やがて姫は病を得て亡くなってしまいました。

権太夫夫妻は姫を棺に入れて大切にしていましたところ姫が夢枕に立ち、「私に食物をください」と言いました。慌てて棺を開けてみると姫の姿はたくさんのおきな虫の姿になっていました。

そこで姫の乗っていた舟の桑の葉を与えるとやがてまゆになりました。どうしようかと権太夫が考えているところ筑波山の神さまがまゆから糸を取ることを教えたのです。これが日本の絹の原点となりました。

そのまゆの様子を模したのがまゆ玉で、小正月の風物詩になりました。

ちなみに、県西には鬼怒川、小貝川など「絹」や「蚕」を連想する河川もあります。さらに県内には日立市、鹿嶋市のほかに福島県会津市、神奈川県などに金色姫の伝説を残しています。

新年の行事の源泉は面白いものがあります。茨城から生まれた年中行事はこのほかにもあるかもしれません。来年はみなさんも探してみませんか。

〈参考文献〉「筑波歴史散歩」宮本宣一著、ほか



【所在地】つくば市神郡1998